## 総人口の推移(p4)

【これまで増加し続けていた我が国の人口は、一転して減少していく見通し】

終戦直後の 1945 (昭和 20) 年に 7, 215 万人であった我が国の人口は、その後、ほぼ一貫して増加を続け、1967 (昭和 42) 年には 1億人を突破し、2008 (平成 20) 年には 1億2,808 万人とピークに達した。

しかし、その後は減少局面に転じ、2015 (平成 27) 年の総人口は 1 億 2,711 万人と 2011 (平成 23) 年から <u>5 年連続で減少</u>している。 国立社会保障・人口問題研究所の「日本の将来推計人口(平成 24 年 1 月推計)」の出生中位・死亡中位推計によると、我が国の人口 は今後も減少し続け、<u>2048 (平成 60) 年には 9,913 万人と 1 億人を割り込み</u>、2060 (平成 72) 年には 8,674 万人になると推計され ている。

また、2061 (平成 73) 年以降の人口については、参考推計ではあるものの、2100 (平成 112) 年には 4,959 万人と 5,000 万人を下回る 見込みとなっており、明治時代後半の 1900 年頃から 100 年をかけて増えてきた人口が、今後 100 年のうちに再び同じ水準に戻ること が見込まれている

## 人口構成の変化 (p5)

【今後も高齢化は急速に進展。2060年には約2.5人に1人が高齢者となる見込み】

我が国の人口を年齢3区分別人口で推移を示すと図表1-1-2のとおりとなる。これを見ると、年少人口(14歳以下)割合は、1950 (昭和25)年以降、ほぼ一貫して現在まで減少しており、生産年齢人口(15~64歳)割合についても、図には示していないが、1992(平成4)年の69.8%をピークに現在まで減少し続けている。将来(出生中位・死亡中位推計)においても、年少人口及び生産年齢人口の割合は、2060(平成72)年まで一貫して減少が続いていくことが見込まれている。

一方で、1950 年時点で5%に満たなかった<mark>高齢化率</mark> (65歳以上人口割合) は、1985 (昭和60) 年には10.3%、2005 (平成17) 年には20.2%と急速に上昇し、2015 (平成27) 年は26.7%と過去最高となっている。将来(出生中位・死亡中位推計)においても、2060 年まで一貫して高齢化率は上昇していくことが見込まれており、2060 年時点では約2.5人に1人が65歳以上の高齢者となる見込みである。

さらに、人口構成の変化を人口ピラミッド(図表 1-1-3)で見てみると、1950 年時点では、若い年齢ほど人口が多い富士山型であったのが、2014(平成 26)年になると山型のパターンはすっかり消失し、中高年層の部分が増大している。1950年と 2014年の人口ピラミッドを重ねてみると、若年層が大きく減少する一方で中高年層が大きく増加していることがよく分かる。

2060年になると、少子高齢化はさらに進展し、その結果、重心が非常に高い、いかにも安定のよくない逆ピラミッド型へと変化している。2014年と2060年の人口ピラミッドを重ねてみると、総人口が減少していることが分かるが、年齢区分別で見てみると、年少人口及び生産年齢人口が大きく減少している一方で、高齢者人口、特に75歳以上の後期高齢者人口は、逆に増加していることが分かる。